

海ユリ、ポリプ、ペンムシ、アメーバが群生する“原始の海”。太郎のメッセージが凝縮された空間だ。

「《生命の樹》でいちばん重点を置いているのは、単細胞なんだ。単細胞から、人間にいたるまでの生命進化のプロセスを展示するわけだけど、単細胞がフワフワと得体の知れない格好でゆれている。それを見たときに、みんな自分がその単細胞である、そんな単細胞になりたいなど、生命の根源に非常に魅力を感じる。そういうようなことをぼくは楽しみにしているわけだ。国威宣揚とか、未来への誇張した展示でおどかさようなものもいいかもしれないが、根源的なものを再認識させないと、ますます人間がスポイルされてくる。」

(『デザイン批評』1968.季刊第6号)



「進歩が歴史の栄光なんだといわれてきたのだが、それは逆に人間疎外、人間喪失ではないかとぼくはいつてるわけです。」

(『Die Welt』1969.1月号)



“It has been said that progress is glory of history.
But I'd say it is alienation or loss of humanity on the contrary.”

「生命の樹は、
アメーバ単細胞から人間にいたるまでの発達を、
無邪気に絵本のような形で
展開するつもりでいるんだ。」

(『デザイン批評』1968.季刊第6号)



“On the Tree of Life,
I'm going to develop the evolution from single-celled ameba
through human in a way of a childlike picture book.”

「全体として生命の尊厳を感じとらせるつもりです。単細胞生物のアミーバをでっかくつくりたいかと考えています。アミーバってのは、形のあるようなないような、丸いようなゆがんだような…、ああいうのがぼくは理想ですよ、生命のね。アミーバみたいなものを見ると、ああ、こういうものになりたいと思う。人間てのは、よけいなことばかりに振り回されて、自分がほんとに願っていることじゃないことで動かされて、ほんとにつまらない。その生命の理想が、はからずも生物のいちばん初源のところにあるんですよ。いちばんの初源といちばんの究極は、じつはピシッと一致するというのが、ぼくの考えなんです。」

(『三洋化成ニュース』1968.5月号より抜粋)

